大地の恵み

blessing of the earth

vol.16
H27.3

「水土里キッズのわくわく探訪inＯＧＡ」
ー 土地改良施設巡り ー

- ●水土里キッズのイラスト展
- ●「2014語り部交流会inあきた」
  ～三堰が語る農地･水の多面的役割～
- ●雪中田植え
- ●第15回美しく豊かな農村づくり
  写真コンクール（水土里ネット秋田）
- ●平成26年度活動状況報告

あきた　食料･環境･ふるさとを考える地球人会議

2014 語り部交流会 in あきた

～三堰が語る農地・水の多面的役割～

1月29日、秋田市の遊学舎で「２０１４語り部交流会ｉｎあきた」が開催され、約２００人が訪れました。この交流会は、仁井田堰土地改良区・秋田市旭川筋土地改良区・秋田市孫左衛門堰土地改良区が主催し、秋田地域振興局農林部が共催、あきた食料・環境・ふるさとを考える地球人会議等の後援で行われたものです。

はじめに仁井田堰土地改良区の熊井理事長が「私達３土地改良区は、太平山の山麓を水瓶としており、先駆者の疏水開鑿や隧道開発等の艱難辛苦の上、今日の水田地帯の形成に至っています。混住化社会の中でも、私どもが培ってきた風土を大事に維持しながら、米作りの歴史を守り、田園の空気清浄地帯としての役割を温存して、農業振興や地域の活性化に繋いでいきたいと思います」と挨拶し、開催に期待を込めました。

次に「三堰物語～水と緑が一番大事～」というテーマで、あきた森づくり活動サポートセンターの菅原所長が三堰それぞれの歴史や、治水・利水について基調講演を行いました。菅原所長は「私も現在『秋田森づくりサポートセンター』で活動しているので、この３つの堰の先駆者の中では特に鎌田孫左衛門さん（秋田市孫左衛門堰）に大賞を贈りたいと思います。彼は、治水・利水を行っただけではなく、植林を積極的に行う等、『水源の森づくりをした』という点で、個々のかんがいからすべてを繋げて合理的な水系社会を作ったことを高く評価したいです。この三堰物語で一番感じるのは、水があって初めて田んぼが拓け、村も発展してきたということ。そういう意味で『水と緑が一番大事』という結論になりました。土地改良区の方々や受益者の方々に、水を利用するだけではなく、水源の森づくりにも興味を持ってもらえたら非常にありがたいと思います」と話しました。

「三堰の歴史の継承、保全管理、地域学習に関する活動報告」では、仁井田堰土地改良区の伊藤事務局長、秋田市立外旭川小学校の大野校長、秋田市孫左衛門堰土地改良区の鈴木事務局長がそれぞれ活動報告を行い、今後の保全管理や多面的機能としての役割、地域学習の重要性などを熱く語っていました。

最後に「三堰が語る農地・水の多面的役割」と題した語りフォーラムが、秋田県立大学の高橋教授をコーディネーターとして行われました。（次ページより特集）

菅原所長は「２００年から４００年の歴史を持つこの三堰のような地域の宝物を、非農家の方達にも積極的に伝えていかなければと思います。先人の苦労を伝え、地域の誇りを再発見していきましょう」とフォーラムを統括しました。農地や水、歴史的施設などを地域共有の財産として保全・継承していくことが、地域の絆や活力の向上につながると強く感じられました。

報告

三堰の歴史の継承、保全管理 地域学習に関する活動報告

① 改良区で10年間 水土里のみちウォーキング in仁井田を開催

仁井田堰土地改良区
伊藤 清栄 事務局長
（ふるさと水と土指導員）

JAと連携して参加者にお米をプレゼントしたり、ゴールに地元の朝採れ野菜の産直コーナーを設置する等普段の仕事だけでは接することのない方達とも繋がりが出来ました。また、長い間の開催を支えたのはスタッフへの感謝の言葉のおかげです。今は休止中ですが、また機会があれば積極的に活動していきたいです。

② 先人への感謝と地域学習の大切さ

秋田市立外旭川小学校
大野 進 校長

郷土探訪学習では、『ふるさと先生』という形で今日おこし頂いている土地改良区や農業関係の方に沢山協力してもらっています。『穴堰』は外旭川に住む我々には無くてはならないものです。そのことを、学校のHPにも『穴堰物語』という紙芝居を掲載して探訪の前に児童に説明しています。

③ 今後も保全活動に力を入れていく意欲

秋田市孫左衛門堰土地改良区
鈴木 英弘 事務局長

管内にある隧道は総延長540m、長いところは130mも続いていて、冬に凍りが着くと崩落します。長いところに土砂が入り込むので取り除くのに難儀していましたが、26年度から多面的機能支払交付金で補修を行っています。150年以上も続いてきた用水を、これからも地域の財産として守っていきたいです。

語りフォーラム

『三堰が語る農地・水の多面的役割』

●パネラー
伊藤清栄（仁井田堰土地改良区事務局長）
大野　進（秋田市立外旭川小学校校長）
鈴木英弘（秋田市孫左衛門堰土地改良区事務局長）
菅原徳蔵（あきた森づくりサポートセンター所長）

●オブザーバー
高橋順二（秋田県立大学生物資源学部教授）

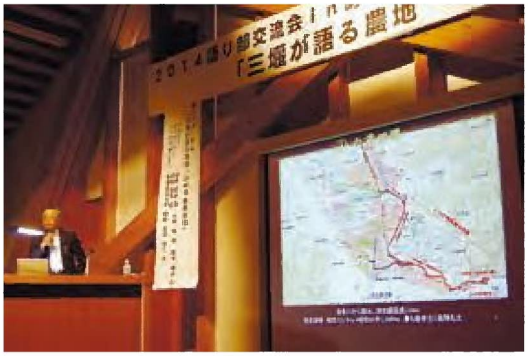
●コーディネーター

高橋：秋田県立大学生物資源学部の高橋です。本日は「語りフォーラム」の進行役を務めさせて頂く事になりました。私は秋田県南部の出身で、昨年40年ぶりに農水省をやめて、こちらの方で教鞭をとらせてもらっています。どうぞ宜しくお願い致します。高校生の時にこちらを出ましたので、なかなか秋田に精通していない所もありますが、しばらくの間進行にご協力頂きたいと思います。それではまずはじめに、三堰について色々とお話を頂きました3名のパネラーの皆様にもう少し掘り下げてお話を伺えればと思います。最初に各取り組みにおける苦労や課題をお願いします。トップバッターとしてふるさと水と土指導員の伊藤様、平成15年から10年間ウォーキングイベントを続けて来られた中で一番苦労した点などをお聞かせ願えればと思います。

伊藤：仁井田ウォークに関しまして、10年間ずっとやってきましたが、苦労した点というのは、「安全面」だと思っています。人の募集や準備は、沢山のスタッフの方々に携わってもらっていましたが、安全管理の面については、今回のコースは大きい用水路の縁や公道の歩道など、沢山危険を含んでいる場所をどうしても設定しなければいけないので、10年間ずっと苦労してきました。その対策として、コースどりの際、プロの目で見て頂くこと。開催当初から「秋田県ウォーキング協会」の方々にご協力頂きまして、こちらの要望を汲んで頂きながら、安全なコースどりをしてもらったという経緯があります。また、特に子供さんに沢山参加して頂いていますが、大人の皆さんも水が流れていると「側に寄って見てみたい」、「触ってみたい」という欲求に駆られるみたいでして。せっかく水路とか、自然に触れて頂きたいということで始めたウォーキングですから、「触るな」とか「近づくな」ということは言えません。開催して2～3年のときには歩くスタッフの方を増員したり、救命に使うプラスチック製の浮き輪を準備したり、救命胴衣や、ロープを準備したり。年々積み重ね、安全面にはかなり苦労したと思います。また、ずっとやってきた中での課題は、「長く続けていくためにはどうすればいいのか」ということで、アンケートを取って毎年検証したり、次の世代にこういった農業に関するようなイベントを継続・繋げていくにはどうしたら良いか考えたり、その2つの面が苦労した点だと思います。

高橋：伊藤様、ありがとうございました。次に大野校長先生の方からお願いしたいと思います。「郷土探訪学習」という学習をされているとお聞きしました。非常に素晴らしい取組みだと思いますけれども、ご苦労されている点を、より深くお話頂ければ幸いです。

大野：この活動は「ふるさと先生」がいらっしゃればこその学習です。そのため、ふるさと先生達のご都合に合わせて期日を決めているのですけれど、その日程調整が学校の行事とすりあわせるのが難しいということがあります。また、野外活動のため、天候に左右されやすいということです。過去にも悪天候で延期し、違う日を決めたのですが、その日もやはり天候が悪く、これ以上はもう延期が出来ないということで、校内でふるさと先生からお話を聞くように変えたこともありました。その年の6年生はそれが最後の学



習の機会なので、非常に残念がっておりました。毎年、「今年こそ晴れてくれ～」と願っている所です。

高橋：ありがとうございました。お三方目に孫左衛門堰土地改良区の鈴木事務局長さん。多面的機能支払交付金で地域共同の取り組みを行う際にリーダーシップを発揮されていらっしゃるようですが、ご苦労された点を補足頂ければ幸いです。

鈴木：現在、私どもの堰管理の状況については、毎年今頃に堰の管理担当、うちの方では「用排水調整委員会」と言っていますが、そういう会議を開催していまして、今までの堰の状況等を確認、その後今年度の管理内容について話し合いを行い、浚渫、草刈り等の人夫、日数、予算額などを決めています。近年、年度が4月に変わりまして、田んぼの春先の仕事も機械化になった事から、作業がだいぶ早くなりました。4月に入れば、種まきの準備等に入る状況です。そういう中で、浚渫の際の人夫を集める方が高齢になり、人夫をお願いするにもなかなか難しい状況になってきています。そういうときには、堰守という担当がいまして、その方々に連絡してやってもらっています。それと、水路の老朽化も目立っております。26年度から「多面的機能支払交付金」等を利用し、負担軽減を図りました。これからも話し合いをする場を多く設けて、堰の問題点を解決していくように努力して行きたいと思っています。

高橋：ありがとうございました。農業や地域を巡る環境、高齢化などもご苦労の中に滲み出ている気がしました。次に、こういった取り組みを通じて得たプラス面や手応えをお話願えればありがたいと思います。それでは最初に大野校長先生の方からお話しを頂ければと思います。

大野：この学習により、先人の方々の並々ならぬ努力によってトンネルが掘られ、水を引くことが出来、外旭川地区に水田が広がっているということがわかった児童が多かったようです。「これからも、昔の人達が頑張って作った穴堰を大事にしなければと思います」、「穴堰を掘るのは大変な作業だったと思うけど、今はすごく便利になっているので大切にしなければと思いました」、「これからは、穴堰のことをもっと知って、色々な人に伝えていきたいと思った」と、感想は一部の児童のものしか紹介できませんが、学習した児童たち全員が穴堰の大切さに気付いたと思います。

また、この活動の後に子供達が家に帰って家族にこの学習についてお話しをする訳です。外旭川地区に住んでいると言っても、他から移転されてきた方が沢山いますので。昔からの歴史を知っている方はほんの一部だと思います。その一部のお母さんから感想を頂いたのでご紹介します。「子供が家に帰って、ご飯を食べながら地域探訪学習の話しをして、穴堰をはじめとする地域の歴史を初めて知りました。子供から教えてもらうことが沢山ある、素晴らしい活動だと思いました」とお褒めの言葉を頂いております。子供を通じて、地域の方々に外旭川の素晴らしさを知ってもらう効果も期待できると思っております。

高橋：ありがとうございました。親御さん・お子さんの反応を面白く感じました。それでは次に、伊藤さんの方からウォーキングの成果、あるいは手応えについて、お教え下さい。

伊藤：ウォーキングの効果ですが、まずは我々土地改良区の職員や役員が、日頃接する事の少ない方々と一緒になってスタッフとして動くことで、県や市町村、土地連など色々な関係の方々と親しく過ごす時間が出来たのかなと思います。そういった点では、仕事の中で事務的な関係だけになっている部分もあったのですが、こういう形で世代や職場の垣根を越えた活動をすることによって、この10年間で関係が濃密になり、濃い繋がりを持つことが出来たと思っています。また、地域の皆さんも、このウォーキングをやるということで、始めて2～3年くらいからは農地・水事業、今は多面的機能支払ですけれども、これまで例えば幹線水路沿いの草刈りは、年に2回、中々手の回らない所では1回とか、本当にギリギリの段階で管理をされていた訳です。それを、「今度ウォーキングが始まり、何百人もの人が来るので、申し訳無いけれども何とか皆さんの力を合わせて草を刈って綺麗にしてください」とお願いをしたところ、関係地区の皆様には10年間ご協力頂きまして、本当に感謝申し上げます。そういったことがきっかけで、その人達が管理している所に行きますと、現在もほとんど草の伸びているのは見たことがないという状況です。このイベントを通して、自分たちから地域を綺麗にして行こうというような活動に繋がったのかなと思います。地域や関係者の皆様と本当に強い絆が生まれた10年であったと思います。

高橋：ありがとうございました。最後に、鈴木事務局長さんから、多面的機能支払は今年度から地域共同活動で初めて行ったと聞いていますが、その活動に取り組んでの成果を付け加えて頂ければありがたいと思います。

鈴木：この件につきましては、多面的機能支払交付金という制度で、今まで農家の人は水路の泥上げ・草刈り等は自分たちでやるのが通例でしたが、その管理等において国の制度で助成がもらえるという内容になっています。特に、今は厳しい農業情勢ですので、少しでも組合員の負担軽減になればということで取り組んでおります。そういう意味では一年間やりましたが、だいぶ助かっています。また、この活動におきまして、実践活動では「草刈り」、「水路の泥上げ」を主にやっていますが、その他に、色々な問題について、今後の農業をどういう風に持って行くかという話し合いや、点検活動があります。そういった場で、今まで以上に地域で話し合い、将来を見据えた農業施設の管

理をどのようにしていくか、どう進めていけば良いのかと思いますが、まず今年度は初年度ですので、皆で協力して、一生懸命目標に向かっているという状況です。

高橋：ありがとうございました。ちょうど平成14年だったと思いますが、国営造成施設については、管理体制ができたということで、その後、農地・水環境保全活動、そして今年から法律の改正を受けます「日本型直接支払」ということで、色々これまでの流れがあったかと思いますが、農地・水環境支払や多面的機能支払、といった公的な支援に取り組まれている活動は、地域に調和され、農村を歩いていてもそういったことを感じることが多くなってきました。菅原所長さんの方から、これまでの三堰に関する取り組みや、課題、成果について、感想やアドバイスがあればお願いしたいと思います。

菅原：一つ目は仁井田堰のウォーキングですけれども、ウォーキングする所は一つの川のような水路でありまして、水辺環境が素晴らしくて神社や史跡も沢山あり、絶好の場所であると思います。前に伊藤さんと古川で「生きもの調査」をやったことがあるのですが、そのときに、鮎やハリザッコ等非常に珍しい魚も沢山いて、「生物の多様性」ということに関しては、古川の排水路は素晴らしいと思います。是非親子も含めてそういった生きもの調査を行っていくことで、また違った仁井田周辺の素晴らしさも分かるのではないかなと思います。確かそういう所に詳しい人も沢山いますし、釣りのメッカにもなっていますしね。あそこにはおそらくホタルも沢山いるのではないかと思います。そういった「生きもの」をとらえた形での「親子教室」みたいなものをやってもいいかと思います。そうすれば、もう少し多面的機能に関する理解、生命の多様性に関する興味も生まれるのではないかと思います。

二つ目の外旭川の取り組みとしまして、「ふるさと先生」と言って地元の人を先生にして農業農村の歴史を学ぶといった点では非常に素晴らしいと思いました。確か稲川土地改良区では出前事業ということで紙芝居などやられていますけれども、岩手県も沢山紙芝居を作って小学校の出前事業をやっています。そういう意味で、紙芝居を作って、子供達に分かりやすいような歴史を学ばせる「出前事業」も考えていくべきではないかなと思います。

三つ目に孫左衛門堰は現場を見て老朽化していると感じましたが、間違いなく作ったときの苦労がよく分かります。地形が複雑なところを通っていて、トンネルが5箇所もあり、老朽化も激しいということから、維持管理には相当苦労していると思います。しかも延長が12kmもあり、かつて300町歩あった面積が半減しているということで、おそらく相当非農家の方もいたと思います。非農家の方も含めて、維持管理していくとなりますと直接支払をうまく使い、維持管理費の軽減を図って行くしかないと思います。トンネルについてはできるだけ早く更新をして、維持管理に負担がかからないような形でやっていければいいのではないかと思います。

高橋：それではここで、会場の皆様からご質問やご意見・ご提案がございましたら、お願い致します。

質問：秋田市旭川筋土地改良区の佐藤です。先生方にお聞きしたいのですが、先ほど『穴堰』のことを大野先生が学習の一環として取り入れらているということをお話されました。子供達も一生懸命頑張っていて、私の知り合いにも『ふるさと先生』がいらっしゃいます。ただ、聞くところによるとこの穴堰はもう2～3年で無くなってしまう予定で、早ければ今年の秋から別の隧道にかかるようです。県は新しい隧道ができあがったら、今の古いものは様々な災害の危険性があるので『穴を埋め戻す』という予定になっています。現場はもう無くなりますので。そういうときに、子供達に先人のすごい事業をどういう風にして伝えていったらいいのか。入り口はあるでしょうけれども、実際水は流れませんし、そこがふさがれるということになると、これからどういう風にして我々が子供達に伝えていけばいいのか先生方からアドバイスをお聞きしたいと思います。

菅原：記録に残すとなれば、写真を撮るとか、動画で撮るとかしかないと思います。それから、先ほど紙芝居のお話しもありましたけれども、先生でも誰でも絵の上手な人に歴史も含めて描いてもらえれば良いし、子供達が「あの隧道を潜って旭川に泳ぎに行った」というような昔話を含めて、そういった紙芝居があれば楽しいのではないかなと考えています。いずれ「記録」で残すしかないと思うので、紙芝居なり、文章なり、写真なり、データで残すしかないかなと思います。あとは見える所に看板を立てる等も考えられます。後例の菅江真澄の絵図もあるので、できればそれも活かして頂きたいと思います。せっかく鬼越山の古い穴堰を記録していますので、今の穴堰と違うところにも1600年代に作られた古い穴堰があったということをきちんと伝えていくべきです。あの堰は、おそらく400年の歴史を持っている堰なので、後世に伝える義務があると思います。そういう古い穴堰も含めて、トータルで残して頂ければありがたいと思っています。

高橋：最後に、パネラーのお三方のから三堰に対する今後の取り組みについて、計画や希望、今後

の方向などについてお話をお願いします。

伊藤：最後に、「継承」ということで、外旭川小学校の大野先生もおっしゃったように、これから物事を伝えていくためには、子供達に長い時間をかけて教えていくのが一番良いのかなと私なりに思っております。というのは、実は自分の子供のときにＰＴＡの役員をする機会がありました。そういった機会に学校の方にお邪魔して、子供達の前に立って話した後に「水土里ネットのおじさんだ」「歩け歩けのおじさんだよね」と声をかけられた事が何回もあります。子供達はお父さんお母さんに連れられてウォーキングに来ていたのかもしれないですが、私の事をちゃんと覚えてくれて、記憶のどこかに残っているのかなというのを改めて思ったときがありました。そういったことも含め、先ほど菅原先生がおっしゃいました「田んぼの学校」につきましても、地道な活動に目を向けて、「継承」という形も含めまして土地改良区の役割であったり、水路の歴史だったりを少しずつお話していければと思います。

鈴木：堰のこれからの管理・継承についてですが、今日は、私の方の役員さん・総代さん、組合員さんも来ておりますし、こういう場で皆さんに改めてお話をすると

いうことも大事だと思います。おそらく皆さんも、今後の三堰の継承について、色々な思いを募らせる機会になったと思われます。改良区の事務局としましても、堰の管理については、今後出来る限り行政の政策を活用しまして、負担軽減を図って参りたいと思います。今後は、この農村風景・水源涵養の点から見まして、農家だけではなく、地域を巻き込んだ保全管理、多面的機能支払交付金を利用し、一緒になって地域で守って行くような形をとって行ければと思っています。

大野：穴堰を含めました地域探訪学習は、本校の特色ある地域活動の一つであり、今後も大切にしていかなければ行けないなと思います。それから、児童だけではなく、保護者の皆さんにも是非穴堰を含めた地域の良さを知ってもらいたいです。保護者の皆様には、引率やお手伝いを願うという形で、希望される方にはおいで頂いていたんですけれども、実際はグループで1人か2人ということですので、今日この場で色々お話を伺って、やはり私達学校の役目としても、子供ばかりでなく、地域にいかに素晴らしさを広げて行くかというのも、仕事の一つかなと思っています。次回からは、保護者の皆様にも呼びかけて、是非地域に広げるということ

も考えていきたいと思っています。また、この活動の究極の目標は何かと言うと、自分の住んでいる外旭川の良さを発見し、ふるさと秋田を大切に思う子供達を育てていくのが、究極の目標です。

高橋：最後に、今日オブザーバーとして基調講演の場に参加して下さいました菅原所長の方から、全体を通しまして、農地・疏水を今後どのように次世代に継承していくのか、といった観点から一言お願いします。

菅原：三つの堰は、２００年～４００年という歴史を持つ『歴史遺産』だと思いますし、地域全体の宝物だと思っております。その宝物を非農家の方々にも理解してもらわないといけないということで、先ほどの堰の水を引くための先人の苦労を、そして田んぼ

を拓いて村を作ったルーツをきちっと伝えていく必要があるのではないかなと思います。やはり、水路で繋がっている水系社会ですので、非農家も含めて『運命共同体』な訳ですね。堰が壊れて水が来なくなると、たちまち農業も村も滅びると言うことですので、そういうものを将来にも維持・継承していくためには、非農家の方々の協力も得ながら、維持・保全をしていかなければ、今後なかなか継続して行かないと思います。次の世代の子供達にも当然伝えて行かなければいけないし、継続して維持・保全していくためにはやはり『地域の誇り』を再発見していかなければと思っていまして、そのキーワードは『地域の歴史・文化』になると思います。それを支えてきたのは、２００年～４００年の歴史を持つ『堰』が一番の中心になると思います。その辺りの堰のルーツやキーワードは子供達も含めて地域の活性化や保全・管理に活かして頂ければと思っています。

高橋：お三方の話しの中で、「地域での取り組みの大切さ」というものが共通していたかと思います。それでは、まとめということにさせて頂きたいと思います。昨年９月、宇沢先生が亡くなられました。ノーベル経済学賞の候補になりました、大変立派な先生だった

訳ですが、その先生のお言葉の中に「社会的共通資本」という言葉があります。まさに農業水利施設というのは、社会的共通資本であると思います。その社会的共通資本を、次世代に引き継いで、管理していくのが「土地改良区」なり、地域の皆様方ではないかということで、宇沢先生の「社会的共通資本」の一部を読ませて頂きたいと思います。「**一つの国、特定の地域に住む人々が、豊かな経済生活を営み、優れた文化を展開し、人間的に魅力ある社会を安定的に持続する事を可能にするような社会装置**」を「**社会的共通資本**」と先生はおっしゃっておられます。まさに「農業水利施設」というのは、そういう特質があるのかなという風に感じた次第です。そういった意味で、この大切な多面的機能・水利施設といったものを、私達が次世代に残すような取り組みを地域全体で広めて行ければと言うことで、本日は締めにしたいと思います。パネラーの皆様、オブザーバーの皆様、そして会場の皆様、長時間どうもありがとうございました。

三堰物語

水と緑が一番大事

あきた森づくりサポートセンター所長
（ふるさと水と土指導員）菅原 徳蔵

① 仁井田堰（武左衛門堰）

梅津家四代80年、治水→利水→開墾、武左衛門と渡部斧松

仁井田堰400年の歴史を見続けてきた四ツ小屋のケヤキの大木（白山八幡神社）。その巨木の真下を仁井田堰がゆったりと流れている。

元和2年（1616）、佐竹家の家老梅津憲忠は、藩命を受けて、仁井田原野の新田開発に着手。その成功を祈って仁井田神明社を建立。

仁井田神明社正面の彫刻は、原野を開墾する様子が描かれている。「仁井田」という地名は、開墾でできた村＝「新田（ニイタ）」、その後に「仁井田」と書き改められた。

藩の一大プロジェクトとしてスタートしたが、難工事が続き、完成までに梅津家四代、80年もの歳月を費やした。

仁井田は、岩見川合流点より下流、蛇行が激しい雄物川の右岸に位置し、洪水の被害は、久保田城下にまで及んでいた。平地の湿地帯は水害のリスクが高いので、未開発のまま残っていた。

しかし、治水をせずに新田開発をしても洪水の度に被害を受け続けた。憲忠は、事業半ばにして1630年に没した。

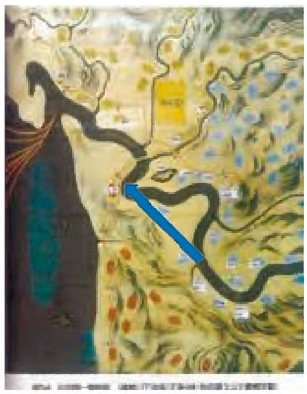
梅津家三代目利忠の時代…藩主は、久保田城下まで水害を及ぼす雄物川の改修を命じた。

豊岩村小山から大野村まで雄物川を真っ直ぐに流れるようにショートカット。この治水工事を3年足らずで完成。

次いで岩見川に水源を求めて、山麓伝いに15キロの水路開削を行い、念願の大プロジェクトを成功へと導く。

藩の一大プロジェクトが完成したのは、四代目・忠宴（ただよし）の時代、実に80年もの歳月を要した。しかし「治水→利水→開墾」という新たな手順を確立した歴史的な大事業であった。

四ツ小屋へかんがいしている武左衛門堰をつくったのは、平鹿郡出身の高橋武左衛門だが、後に「開拓の父」と敬われる渡部斧松が参加し、武左衛門翁から測量開墾等の技術を学んだ。



1815年、400haの美田を開いたが、翁は自分の財産を全部失ってしまった。藩主の義和は、四ツ小屋村に来てその功を讃え、社堂を建て「先農ノ神」と書いてこれを祀って礼拝した。

堰完成から約40年後、1854年6月20日、雄物川と岩見川の大洪水発生し、武左衛門堰が決壊。この時できたのが「ヤブレ沼」。当時秋田藩一の開拓者になっていた渡部斧松は、大破した武左衛門堰と荒廃した田んぼの修復に当たった。

「先農ノ神」と書かれた社堂

「この事業で渡部斧松も堰づくりに参加」

後に開拓の父と言われる渡部斧松（1793~1856）は、武左衛門翁から測量開墾等の技術を学ぶ。暴れ川であった雄物川のショートカット・治水の歴史も学んだ。

1793年8月、新田開発の奨励「秋田藩町触集」

（九代目藩主・佐竹義和・・・
新田開発の奨励、植林の奨励、
渡部斧松の登用、菅江真澄・地誌編纂）

①開発地であっても村で希望者がいない場合は、他村の者が行っても差し支えない。→高橋武左衛門（平鹿郡下境村）・渡部斧松（能代市桧山）

②開発希望者の身分は問わず、軽い奉公人・百姓・町人の者が行っても差し支えない。→長百姓（おとなびゃくしょう）・渡辺久右衛門、麹屋の息子・鎌田孫左衛門

③藩士でも資金を出して開発を行う者については、辛労免に相当する分を与える。

→渡部斧松（能代市桧山）が旧若美町鳥居長根を開拓・・・通常は年貢が5割→減免1割5分

② 穴堰（外旭川）

菅江真澄と古穴堰、穴堰開削で慢性的な水不足解消

久保田城に近い平地、神田は寺内の古四王神社の神の田になっていたから、仁井田と同じく1600年代にかなり開拓されていたであろう。

秋田市史や外旭川郷土史などをみれば1624年、穴堰の開削計画があり、既に古い穴堰が掘られていたとか、渡部斧松は穴堰に関係がない等、様々な説が入り乱れ、これほど異説が多い堰は珍しい。

日本の代表的な古い隧道は、箱根用水の隧道1280m、幅2m。完成したのは1670年のことである。ただし、高さが1mほどの誤差があった。しかも、当時の技術記録はゼロ。掘削技術が民間、他藩に広まることを恐れたからと言われている。

秋田で最も古い隧道は（100m以上）は、能代市の岩堰用水路の隧道200mで1631年に完成。このことから、1600年代に古い穴堰が掘られていた可能性は高いと思われる。

穴堰は約200m、用水不足と水争いを解消するために、名主に次ぐ地位の長百姓・渡辺久右衛門（くえもん）さんが、藩に願い出て開削。

「秋田市史近世」では、渡辺久右衛門からバトンタッチされた斧松が完成させたとしている。しかし、「外旭川郷土史」によると、久右衛門さんが文化文政年間（1804～1829）に完成させ、「一代名字御免」を許されたとある。

その中でも穴堰開削は最も難しい技術で、外旭川一帯は元々藩のプロジェクトで開発された。当時秋田藩一の開拓者・渡部斧松の指導等があったのではないかとも考えられる。現在の穴堰は昭和12年に改修され平成22年4月、老朽化で崩落、応急処置を施す。朝のNHKニュース全国版で放映された。予算の大幅削減で苦慮したが・・・平成25年から、用排水施設整備事に業着工している。（完工予定H29）

■文化10年（1813）春、絵図「鬼越山」（秋田県博物館蔵写本）

説明文には、「穴堰とて昔山を掘りて穴を作り、田の面に水引きたりし所もみなこぼれ失せて、この鬼越山の麓にいくつも残りてそ有ける」・・・1813年、古穴堰の跡はあるが、崩落して機能していないのが分かる。また、この時点では、新しい穴堰も存在していないことが分かる。

菅江真澄「深刻な水不足、水争い」（1812年7月13日「月のおろちね」）

太平山に登ろうと、寺内を出て外旭川方向に向かう途中・・・

「今年は5月の末から、一向に雨が降らず、田の面は割れて作物はみな枯れてしまっていた。川水を汲んで、田畑にかけて暮らしていた村々では、流れが乏しくなることから水争いが起こり、大変な騒ぎである。

もう十日も雨がなかったら生きてゆかれない。ウリ、ナスなどの副食物さえ枯れ果てて、何を食べたらよいのか。ああ、雨が降ってほしい・・・」

・両サイドから掘る→高度な測量技術が必要。
・穴の直径は背丈ほどしかない。
→作業スペースが狭小。熟練した鉱山の最新技術が必要。（人海戦術では不可能）
・硬い岩盤があればよけながら掘り進む→進路を修正必要
・酸欠、崩落、湧水に悩まされる。犠牲者も少なからず。

鎌田孫左衛門（1793～1872）

③ 孫左衛門堰（太平）

提灯測量、水源の森づくりと広域的な水系社会を確立

水と緑の大賞

旭川・太平川の山々では、久保田城への薪・炭として落葉広葉樹の伐採、木材用として秋田スギの供給地で、森林伐採が進み、川の水量が激減。また、開田が進み水不足の被害が深刻化。

鎌田孫左衛門は八田村の麹屋の長男として生まれた。渡部斧松と同年生まれ。翁は、「水源の枯渇は山林の荒廃にある」と、村人に植林をすることが急務と訴えたが、賛同する者はなかった。

九大藩主・義和は、森林の荒廃に対し、林政改革を断行。植林した木を伐採する場合は、農民の取り分を五分から七分に引き上げ、翁のような植林を奨励。

翁は、自ら水源荒廃地を買い求めては、植林に精を出し、百万本の植林を行った。

しかし、水源地としての機能を果たすには数十年、百年を要する。そこで堰の開発に着手。

翁62歳、1855年から7年もかけて水路調査を行い、1862年、70歳、私財を投じて工事にとりかかる。

測量調査になぜ7年もかかったのか。

宅地が連なる山際を堰が走っている。下流のために水路敷地を提供・補償、家屋移転など、合意形成が困難を極めたであろう。

山際を走るルートは地形が複雑で、隧道は大小8ヵ所、延長550mに及ぶ。川を横断する掛樋など、技術的に難しい。（↓渡部斧松の弟子たちから測量及び技術的指導を受けたのではないか）

太平川の堀内頭首工から取水し、延長12km、幅員2.3m。翁は私財をつぎ込み、日夜奮闘しただけでなく、長男や孫にも指揮監督に当たらせた。ふるさとの発展のために、家を犠牲にしてまで命を捧げた偉人がいたのである。工事に要した人夫は数万人、1864年完成。不要になったため池跡5ヵ所（皿池）を開墾。1867年、75歳で亡くなった。

水源の森づくりと孫左衛門堰による広域的な水系社会を確立したという点で、この孫左衛門翁に水と緑の大賞を贈りたいと思う。

秋田市太平黒沢のイタヤ箕製作技術は、国の重要無形民俗文化財。
江戸時代後半には、県内・北海道・関東方面に販売。
全国的にも有名な箕づくりの里。

大地の恵み
vol.16
H27.3
発行
発行・編集 ●あきた 食料・環境・ふるさとを考える地球人会議

あなたの声が“原動力”！
一緒に活動に参加しませんか。

【食　料】

我が国の食料自給率は約40％、もし輸入農産物がなかったら…。
食料自給率の向上は、私たち一人ひとりの課題です。

【環　境】

「水」、「土」、「里」は私たちが生きるために必要です。
今、安全・安心なものはどれですか？

【ふるさと】

緑豊かな田園、心の豊かさと安らぎ、そして人間らしさ…。
あなたは、子供たちに何を伝えますか。

「あきた　食料・環境・ふるさとを考える地球人会議」は、安全な食料の確保のため、環境に優しい社会の創造のため、そして緑豊かなふるさとを子供たちに引き継ぐため、みんなで考え、発言し、行動する組織です。一人ひとりの力が活動の原動力です。みなさんの参加をお待ちしております。（H11.5.18 設立）

地球人会議の活動内容

①シンポジウムやセミナー等の開催と参加
②パンフレットや情報誌等の発行
③アンケート調査等による会員との意見交換
④インターネット等を活用した会員との情報交換

感想をお聞かせください。

「大地の恵み」は、皆さんの声を反映した情報誌にしたいと考えています。
皆さんのご意見・ご感想をお待ちしております。

①「大地の恵み」の内容に対する意見・感想　②地球人会議の活動に関する意見・感想

■水土里ネット秋田内　地球人会議事務局　TEL 018-888-2742　FAX 018-888-2834　E-mail:chikyu@akidoren.com

〒010-0967 秋田県秋田市高陽幸町3番37号　秋田県土地改良事業団体連合会内
URL http://www.akita-midori.net/

「大地の恵み」は地球人会議発行の情報誌です。
地球人会議の会員や公的な機関および多くの方々が集う施設等で、回読誌としてご利用いただければ幸いです。

（シンボルマークについて）
緑豊かな地球を守り、未来へ手渡したいという地球人会議の願いを象徴しています。
緑の地球をシンボリックに表し、芽生えた新芽は、会員一人一人の地球に対する優しい思いやりの心を表現しています。